

介護付き高齢者スナック「Go to Heaven」から、高齢社会の幸せを考える

群馬県の中でもユニークな特徴をもつ高崎市

群馬県高崎市は、群馬県内で最大の約37万人の人口を擁する都市である。新幹線で東京駅から約50分で到着する立地にあり、群馬県の交通の中心地と言える。

達磨の生産量は日本一を誇る都市であり、高崎駅に到着すると、駅の玄関口でまず達磨が迎えてくれる。日本の吉祥である鶴と亀が顔に描かれていることが特徴であり、「縁起だるま」、「福だるま」とも呼ばれ、地域内外の多くの人々に愛されてきた。

また、日本でも数少ないオーケストラがある地方都市として有名である。1961年、高崎市内に建設された「群馬音楽センター」は、予算の1/3が市民からの寄付だったという。その後、1990年から高崎音楽祭、高崎マーチングフェスティバルが開催され「音楽のある街」を標榜し、市民文化を表すキャッチフレーズとしても有名である。

加えて群馬県は歴史的資産である古墳時代に作られた埴輪（位の高い者や権力者の墓である古墳の周辺に立てられた素焼の焼き物）の数も日本一だ。2018年から「群馬 HANI-1（はにわん）グランプリ」が開催され、県内で出土した埴輪にスポットを当て、県内外からの投票により、最も人気のある埴輪を決定する。1500年間王の墓を守り続けたという、「盾持ち人の埴輪」（高崎市・かみつけの里博物館所蔵）は3位に入賞した。群馬県立歴史博物館（高崎市）では、このグランプリの上位作品を一定期間公開して、人気を博している。



高崎駅の達磨



盾持ち人の埴輪（出所：かみつけ

の里博物館)

高齢者に配慮した備品や造りの「Go to Heaven」

そんな群馬県の要の都市である高崎市に、2019年1月に介護付き高齢者スナック「Go to Heaven」が誕生した。高崎駅から徒歩15分ほどのところに位置する。

開店以来、多くの高齢者で賑わっている。店はママで介護士の富澤綾子さんと、ホステスで准看護師の宮川真紀さんが切り盛りしている。

今回は、その「Go to Heaven」で関係者に取材した。その模様をレポートしたい。

1週間に3回、18:00から21:00にオープンする介護付き高齢者スナック「Go to Heaven」。筆者は開店少し前に到着した。ちょうどクリスマスシーズンだったこともあり、トナカイ姿に変装した富澤さんがにこやかに出迎えてくれた。やがて宮川さんも現れ、自分でデザインしたというTシャツとトレーナーを披露してくれた。

2人とも近隣にある株式会社サムエス（代表取締役 荒井浩司氏）のデイサービス施設で働いている。同社は群馬県では17、他の都市で3つの20の介護施設を運営している。訪問介護も入れると約50になるという。



「Go to Heaven」のロゴ入りTシャツを持った富澤綾子さん（右）と宮川真紀さん（左）



「Go to Heaven」外観



看板には介護士・看護師がいるお店と表示

まずは店内を見学させていただいた。血圧計や聴診器、血中酸素濃度の検査機器などが常備されており、手すりも施されている。また店の奥には休憩用のベッドもあった。トイレはバリアフリー対応になっている。この造りを見ただけでも、訪れた高齢者はほっとするに違いない。



休憩用のベッド



店内に設置されている手すり

やがてサムエスを傘下に抱える株式会社サブスクの代表取締役でCHO（Chief Happiness Officer）の栗原志功氏が現れた。時節柄、12月中はずっとサンタクロースの姿で過ごし、プレゼントの袋を下げている。袋の中にはぎっしりプレゼントが詰まっていた会う人ごとにプレゼントを手渡し、幸福感に浸る人々の顔を見るのがこの上なく幸せだと語る。

栗原社長は携帯電話の販売や介護事業など、いくつもの企業の親会社の社長であり、年商総額は200億円を超える。携帯電話の路上販売から始まって20数年が経過した。歩合制も売上目標も持たず、絶えず斬新なアイデアと「すべての人々の幸せのために」という企業マインドから、多くの人々を牽引してここまで来た。

また慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科で、日本の幸福学研究の第一人者、前野隆司教授の研究室の博士課程に籍を置き、研究者としての顔も持つ。



株式会社サムエス 代表取締役 荒井浩司氏
宮川さんが作ったトレーナーを携えて



株式会社サブスク 代表取締役 CHO 栗原志功氏
富澤さんが作った肉じゃがに舌鼓を打つ

続いてサムエスの荒井社長が同社スタッフ及び訪問客とほぼ同時に現れた。もともとは携帯電話の販売に携わっていた荒井社長。しかしこれからの高齢社会を見据えた現職の事業に確かな手ごたえを感じると語る。

サムエスが経営する高齢者施設の利用者には、同店への送迎サービスを行っている。19時頃、サムエススタッフの車から予約客が現れたので、店の印象について尋ねてみた。
病気で左半身に麻痺が残ったが、それでも生活を楽しみたい

訪問客の田村光二さんは、50代後半の男性である。くも膜下出血、脳梗塞を患い、現在、サムエスの施設に通っている。

昔はトラックの運転手をしていて、仕事が終わってから飲むお酒は格別に美味しかったと当時を懐かしむ。脳を患ってからは、左半身に麻痺が出て、体を動かすのが不自由になった。

「このお店は出来て以来、かなり頻繁に通ってるよ。月4、5回かなあ。ほら、来るたびにスタンプを押してもらって、特典がつくお店のカードは、もう2枚目だよ」と田村さんは

嬉しそうに語る。



「Go to Heven」のスタンプカード。3回通うとソフトドリンク
1杯無料、12回だと1000円引きなど特典がある

お店で頼むのはせいぜいお酒を2杯程度、そしておつまみ少々だという。お酒を飲む田村さんのペースに、富澤さんは気を配る。「ゆっくり食べましょう」、「お水も飲んでね」と時折声掛けをする。

「病気を患ってから、いろいろと出来なくなったこともあるけれど、それでも楽しんで生活していきたい。毎日の図書館通いとここで飲むのが楽しみかな」と語る田村さん。介護の専門職がついているので、決して飲みすぎたり食べ過ぎたりすることがない。これが楽しむ術として重要な匙加減になっているのだろう。

筆者も富澤さん手作りのおつまみの肉じゃがをご馳走になった。薄味で、それでいて出汁がきいていて優しい味だ。田村さんとお酒を酌み交わしながら話がはずみ、楽しいひととき

を過ごした。



サムエスの施設に通う田村光二さん（右）と乾杯する筆者

みんなが使ってみんなが管理していく場を創りたい

最後に栗原社長に、今後の展望について聞いてみた。「フランチャイズ化をしたい。このノウハウを生かして、まずは介護施設をやっている事業者が近隣で始める。しかも居抜きで、というのが理想かな。ただしお金をかけずにね」。実際、関西からやりたいというオファーがある。将来的には福利厚生で使うことも頭にあるという。

「介護に携わる自社の職員さんは無料で、自由に使って欲しい。その次にやりたいのが、全国の介護職員さんが集える場にしたい。介護職員さんの憩いの場にして、愚痴を言い合ったり、情報交換したり。そういう場を会社をまたいで創るという試みが今まで無かったから。そういう人たちがスナックのカウンターに座っていれば、高齢者が来ても、みんなが面倒みってくれるでしょう。みんなで管理して、みんなですべていこうという緩い感じがいいな」と語る。

この言葉を聞いて、ふと同社のホームページのトップに書いてあるメッセージを思い出した。

全ては「人々の幸せのために」

お金や地位は一時的な幸福である。

人は「人と人とが繋がる」ことで幸せを感じられる。

携帯電話はそのツールのひとつでしかない。

我々は繋がりを創造するお手伝いをしています。
たくさんの人が幸せを感じられるように。
あなたの幸せが私の幸せです。

決して生き馬の目を抜くような、ベンチャー特有のスピード重視の表現を使わない栗原社長。この人柄に魅せられて多くの人たちが繋がってきたのだろう。

これからも「あなたの幸せが私の幸せ」と多くの人たちとの繋がりを大切にし、新たなビジネスに挑戦していくに違いない。「Go to Heaven」の次なるステージに大いに期待したい。

文 奥山 睦 (Mutsumi Okuyama)
写真 注釈の以外はすべて筆者が撮影
編集修改 JST 客観日本編集部

参考資料：

高崎市オフィシャルホームページ

<https://www.city.takasaki.gunma.jp/>

株式会社サブスク

<http://yourhappiness.co.jp/>

株式会社サムエス

<http://www.samuesu.jp/>

Go to Heaven

<https://snackgotoheaven.themedia.jp/>

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科

<http://www.sdm.keio.ac.jp/>

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科 前野隆司研究室

<http://lab.sdm.keio.ac.jp/maeno/index.html>